㊐ 先生,「すくすく」はまだ？

「すくすく」は，生駒小学校の学校だよりです。「て」の項に書いた生駒台小学校「でんしょばと」の続編ということになります。ですから，先に「て」の項をお読みいただいたほうがいいかもしれません。

生駒小学校の校歌 3 番の「雨風耐えて　すくすくと　伸びる若木に日はそそぐ」から題名をもらった学校だより「すくすく」は 4 年間の在職中に，ちょうど 200 回発行しました。年間授業日数を 220 日としても 4.4 日に 1 回ということになります。

お読みいただいている保護者の方からは，

「いつも『すくすく』ありがとうございます。学校でのことがよく分かってうれしいです」

「子どもたちってすばらしいですね。この間の『すくすく』を読んで，そんなことを考えました」

「学校週 5 日制のこと，よく分かりました。けど，まだ少しの不安は残っています。これからの学校の取り組みに期待しています」

こんなお話や電話，お手紙をいただきました。

「大変でしょう。これだけの回数をこなすのは…」

「よくそれだけの内容がありましたね。すごいです」

といった同じようなミニコミ紙を発行しておられる校長先生方からのご講評もうれしいものでした。

確かに，同じような学校だよりの中では発行回数は多いほうでしょう。しかし，私の場合はＢ5 判 3 段組みで，17 字 59 行です。400 字詰めの原稿用紙に換算すると 2.5 枚というのは決して多くはありません。しかし，「単なるお知らせにはしない。私自身の教育への夢を語り，子どもたちや先生たちには自信とやる気を，そして家庭や地域の

教育力を高めていく」という目的に沿った取り組みであったと少々の自負はあります。

もう１つ自分で決めた課題がありました。それは「予定の字数の範囲内にきっちりと納める」という課題でした。「どうしても入らなくて１行はみ出してしまった」「あれ，１行空白になるなあ」といったことなく常に同じ量に揃えたいと思ったのです。内容の吟味以外に量的な自己規制がこの仕事の楽しみを一層増やしてくれたようでした。

久しぶりにこれを読み返し，内容によって分類すると，次の５つになりました。

1　新しい学力観など教育についての情報や考え方を伝えるもの
2　生駒小学校の取り組みを知らせるもの
3　子どもたちのすばらしい活動を伝えようとしたもの
4　これだけはぜひご家庭でも…とお願いしたもの
5　すぐに教育に結びつかないけれど「こんなこともあるんだよ」と話しかけたもの

発行の度に何枚か多めに印刷しておいたものを，１年分ずつまとめて製本しました。表紙をつけ製本テープで格好をつけると，結構な厚さになり，本のようになりました。

ところで，私の本棚には，何冊かの特別の思いのこもった本が並んでいます。その多くは，ご厚誼をいただいた方々の著作ですが，中には私が執筆したものもあります。明治図書の最新中学校理科指導法講座第２巻「学習意欲を高める理科授業の理論」は栗田一良，山極隆先生編著のもので「学校における教育課程の編成」を私が書いています。東洋館出版社の学校改善を促す校内研修の「第Ⅳ章　初任者研修をいかに校内研修に位置づけ効果をあげるか」は編者の中留武昭先生の依頼で執筆したものです。全連小の大野幸男先生からの依頼で，「学校

経営と校長のリーダーシップ」や「私の感動体験・教職に生きてよかった」にも拙稿を出しています。

また，生駒台小学校の研究紀要である「楽しい授業をつくる教材の開発・工夫」は私が編集したものであり，日本教育会奈良県支部が出した教師と親の体験手記のいくつかも編集を担当しています。

このような中で自分の原稿が本になるという楽しさを味わい，集まった原稿を構成し編集するという創造の喜びを知りました。そして，「すくすく」全 200 枚の中から，これはと思うものを選び出し 1 冊にまとめたいという気持ちがしだいに膨らんできました。こうして選んだものを並べてみると，146 項目になりました。これに，その話の背景や意図を枠囲みで書き加え，写真や挿絵，カットを入れてみました。行数の関係でカットが次のページになってしまって困ったことがありました。カットの大きさや 1 行の長さを変更して調整しました。しだいに本としての体裁ができてきました。

しかし，毎日，少しずつ書きためていったものですから，言葉が統一されていなかったり，同じことを２度書いていたりするところがありました。自分で読んでいては，なかなかそうした所に気付きません。そこで，妻に読み通してもらいました。こうして形を整えたものを，Ｉ出版社に勤務している本好きの長男に送りました。送り返されてきた本文276ページ分の原稿には，覚え違いをしていた人名が訂正され，矛盾しているところを指摘する赤ペンが入っていました。また「このページでは平仮名書きになっている言葉が 45 ページ後には漢字で表記されています。でも，前後の関係からはこのほうがいいかな」といった注も入っていました。そうした校正を 2 度ほど頼んでいます。

こうして，生駒小学校の子どもから私への問いかけである「『すくすく』はまだ？」を書名にした 1 冊ができ上がりました。表紙は，生

駒小学校のＫ先生に頼みました。「私のような者が描かせていただいていいんでしょうか」と言いながら，「子どもと遊ぶ校長先生」の絵を描いてくれました。この表紙を見ながら，「でも，ほとんど遊んでやれなかったなあ」と思い，「遊びの中での触れ合いを大切にしよう」が守れていなかったのは，私自身だったと反省しています。

父が「あしあと」全４巻の製本を頼んだ新踏社に，この本300冊の印刷と製本を頼みました。「カットが1枚足りないようですが」という電話がかかってきたのは，心筋梗塞で入院した翌日のことでした。電話を受けた妻は「今，それどころではないんです」と断ったそうですが，危機を脱した私は必要なカットを病床の上で描き，郵送しました。「やっとできましたよ。300冊はお家に届けておきました」と出来たての２冊をもって安達会長が病院に来てくれたのは，退院間近のことでした。こうして，私の生駒小学校での仕事のまとめが終わったのです。